議題２

平成２５年４月１６日
指導第一課

平成24年度 専門家評価（専門家による第三者評価）の実施について

1 目 的

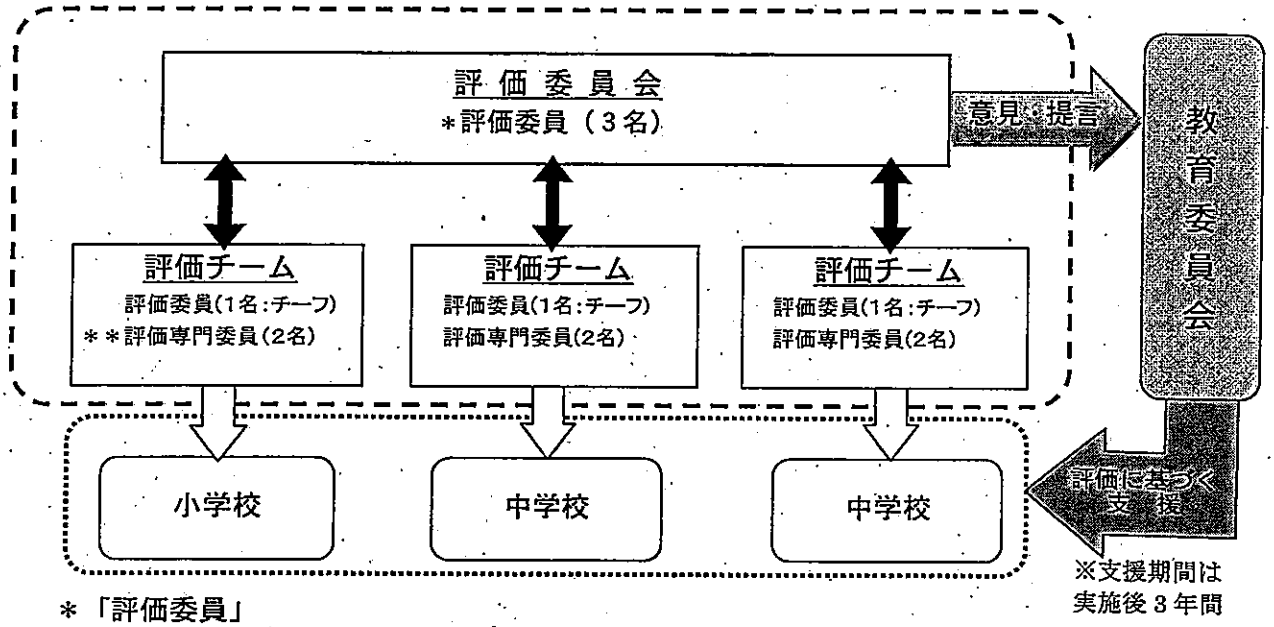
各学校が主体的に行う評価活動（自己評価・学校関係者評価）や教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して、その改善に向けた意見・提言を行うことにより、適切な学校の取組や教育委員会の支援を促進する。

2 対象校

牛田小学校、二葉中学校、五日市南中学校

3 実施体制

平成２４年度 実施体制イメージ図



＊「評価委員」
学校評価及び学校経営を含む学校教育について専門的な立場で評価することができる者で、学校及び教育委員会の運営に直接関係がない者

＊＊「評価専門委員」
教育に関する様々な分野の専門家で、学校及び教育委員会の運営に直接関係がない者

(1) 評価委員会

委員名		所属・役職
委員長	林　孝	広島大学　大学院教育学研究科　教授
副委員長	髙妻　紳二郎	福岡大学　人文学部　教育・臨床心理学　教授
副委員長	曽余田　浩史	広島大学　大学院教育学研究科　准教授

(2) 評価チーム

牛田小	チーフ(評価委員)	曽余田浩史（広島大学 大学院 教育学研究科　准教授）
	評価専門委員	森重　洋（矢野みどり幼稚園　園長、元 小学校長）
	評価専門委員	財津　伸子（比治山大学 非常勤講師、元 中学校長）
二葉中	チーフ(評価委員)	髙妻紳二郎（福岡大学人文学部教育・臨床心理学　教授）
	評価専門委員	財津　伸子（比治山大学 非常勤講師、元 中学校長）
	評価専門委員	瀧口　典子（元 中学校長）
五日市南中	チーフ(評価委員)	曽余田浩史（広島大学 大学院 教育学研究科　准教授）
	評価専門委員	財津　伸子（比治山大学 非常勤講師、元 中学校長）
	評価専門委員	瀧口　典子（元 中学校長）

4　評価目的及び意見・提言

■　牛田小学校

(1)　評価目的

牛田小学校が「言語活動を通して、基礎的な知識と技能を身につけ、筋道を立てて考える力と表現する力を育てる」ために取り組んでいる「授業づくり（指導展開，学習評価等）」や指導の状況について評価し、充実・改善に向けた意見・提言を行う。

(2)　意見・提言

学校に対して

①　これからの方向性について

○　牛田小学校がこれから取り組むべき方向性を示した「仰高*1」というキーワードを、児童にどのように理解させ取り組ませるかが重要である。「仰高」を具体化するために、教務部や研究部等で、現在の学力・学習面、生活面の課題をさらに分析し、何を伸長させる必要があるかを具体化・明確化していくことが必要である。

*1　仰高：現状に満足せず、常に高い次元、理想を目指し自己研鑽、切磋琢磨するという意味(論語より)

②　児童の学力について

○　学力の実態については、通過率の各層の割合をどうとらえるか等について、細かく分析して、課題の有無を明確にし、絞ることが必要である。

③　研究目標について

○　本校の本年度の研究目標に「伝えたいことが豊富に存在する教育活動」が行われ「言語活動」を取り入れた授業を増やすことが示してある。研究は算数の授業であるが、授業観はすべての教科に共通するものである。現在「逆向き授業設計*2」による授業づくりに取り組んでいるが、まず授業の在りよう、学習の在りよう自体が変換される必要があると感じられる。授業づくり、学力・学習面における「仰高」の具体像の一つは研究目標に示した授業づくりであるということもできる。目指すべき授業像を、教員全体が理解し自覚するための研修が必要である。

*2　逆向き授業設計：評価の構想と指導の構想の順序が逆転した発想に立つもので、最終到達目標（子どもに付けたい力）から遡って、評価と指導を検討することが特徴。米国のウィギンズ(Wiggins)が提唱。

④　授業の状況等について

○　本時のねらいを提示するとともに「めあて」「まとめ」が明らかでメリハリのある授業が大切である。今後は、教師の説明や友達との関わりの中で、自分の考えを試し、新しい知識や考えを、自分で獲得していく主体的な学びを育てていく授業がもっと必要ではなかろうか。

○　児童が家庭の教育力によって身につけていることを、さらに学校の取組によって高いものにするには、身につけることが児童自身の自己肯定感や効力感、誇りにつながるように指導することが必要である。このことを踏まえて取組を計画、推進することが必要である。

○　学年目標、クラス目標、学習規律、合い言葉、保健・生活・あいさつの目標などが各クラスに掲示してあったが、子どもたちはこれらの目標に対してどのように思っているのだろうか。どれが中心なのか、どれが重点なのか、精選する必要がある。

⑤　課題把握と解決の取組について

○　本校では、課題把握とその解決に、「校長ー教頭ー企画委員会ー各学年会」が組織的に取り組んでいる。今後は、こうした取組を個々の教員が自己申告書等へ反映させることにより、一層効果的なものとする必要がある。

教育委員会に対して

①　施設整備について

○　開放廊下のため、廊下掲示のスペースが限られている。廊下への掲示物を活用した教育を推進するための掲示スペースの確保を考慮する必要がある。

②　校内授業研究の推進について

○　指導主事等による校内授業研究推進のための指導が必要である。

③　人事上の配慮について

○　本校教諭の年齢構成は５０歳代４７．５％、４０歳代１５．０％、３０歳代２０．０％、２０歳代１７．５％となっている。若い教師に対して、実践の中で授業づくりを示すことができる中堅教員の配置が必要である。

■ 二葉中学校

(1) 評価目的

「人間関係づくり」を基盤とした学習指導と生徒指導の一体感ある授業づくりやその指導の在り方とともに学校運営の状況について、専門家の立場から客観的評価に基づいた助言を提供することにより、学校改善の具体的な方向性を示す。

(2) 意見・提言

学校に対して

① 学校運営について

○ 校長は、本校の組織マネジメントの方針をさらにシンプルに示すことが必要である。特に達成可能な具体的な目標を「生徒の姿」として示すことが重要である。また、管理職が学校経営目標をしっかりと提示し、教員はこの学校経営目標を踏まえた個人目標を設定する必要がある。

② 教職員・授業について

○ 短期経営目標の評価指標にある「本時のめあて」シートの活用、協同学習などを意識した授業に変わりつつある。今後は、授業の中での振り返りを重視し、生徒がどこまで理解して何を課題にしているのかを日々把握することに、意を用いることが大切である。これらの実現のためには教員が切磋琢磨する環境をつくる必要がある。継続した講師の招聘、研究指定を受け、定期的、継続的な授業公開に取り組むことなどが大切である。

○ 課題を抱えた生徒だけにとらわれず穏やかな生徒への教育効果をいかに図っていくかが大事な点である。体育大会や文化祭など現在、二葉中が自慢できるものを更に伸ばしてもらいたい。その際、教師と生徒の間に親しさと節度を区別させる習慣づくりもあわせて意識してもらいたい。

③ 生徒指導について

○ 二葉中の生徒像（どんな生徒に育てるのか）を教員が共有化し、良さを伸ばす取組を進めてもらいたい。教師主導ではなく、いじめ没滅キャンペーン、授業前の着ベル、机そろえなどの生徒会の取組につなげていくことが大切である。

④ 組織について

○ 生徒指導の方針を共有することが何よりも必要である。報告・連絡・相談を大切にし、ぶれることのない具体的な学校方針を決めておかなければならない。

○ 生徒会執行部と話し合い、教師と生徒の間で身近な約束事（例：あいさつ、掃除、授業規律等の身近なきまり）を３点程度決定することが望ましい。そして、普段からまじめに取り組んでいる生徒が目立つ生徒会となるよう、職員の積極的な支援も欠かせない。

⑤ 家庭・地域との関係について

○ 現状を「学校だより」等により保護者はもちろん、地域にしっかりと周知させたうえで協力をあおぐことが必要である。

○ 生徒指導面に関して、保護者や地域住民が戸惑うことがないように、ぶれることのない具体的な学校方針を決めておかねばならない。

○ 本校に関わっている住民や保護者（PTA関係）の学校に寄せる期待は高い。「まちぐるみ『教育の絆』プロジェクト」における、放課後学習会の取組や「クリーンマイタウン二葉」として地域清掃活動を行っていることは、是非本校の伝統となるよう継続・深化することが必要である。

教育委員会に対して

① 地域による学校支援について

○ 多方面からの視察もあり、本校を取り巻く事情は関係者に広く理解され、関心も高まるところとなっている。幸い、地域による学校支援が活発化してきており、保護者や地域住民の協力も得やすくなっている傾向にある。引き続き、教育行政からの財政的なバックアップが望まれる。

② 人事上・予算上の配慮について

○ 生徒指導方針のぶれが生じないようにすることを前提に、今後も、本校に対して生徒指導の経験が豊富な職員を配置するとともに、授業改善の核となるミドルリーダーの配置が必要である。

○ 規律定着に資するため、部活動を活性化させる必要がある。したがって部活動指導にも熱意をもった教員の配置と必要な備品の整備が望まれる。

③ その他

○ 二葉中学校の取組や成果について、広く市民に向けてアピールする必要がある。

■ 五日市南中学校

(1) 評価目的

五日市南中学校が取り組んでいる「いいとこ見つけ！カード（ほめ・励ましカード）「ええじゃんカード」等」の活用や小学校等と連携して生徒をはぐくみ育てる教育活動の充実について評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

(2) 意見・提言

学校に対して

① カードの活用について（自己肯定感の育成）

○ 現在の手立て（「いいとこ見つけカード（ほめ・励ましカード）」「ええじゃんカード」等）に、恒常的な方法（たとえば、生活記録や日記ノート等）を加える必要がある。

○ 先生が生徒とともに活動する機会をより多くし、生徒にも先生の「ええじゃん」を多く見つけてほしい。

○ 生徒には、実感を伴った評価をすることが大切であり、日々の取組を継続的に丁寧にポートフォリオにして気付かせる等の方法を加える必要がある。

② 学級経営・生徒指導について

○ 学級づくりについては、例えば、係の活動内容にかかわる掲示コーナーを設けたり、活動の目標や成果を生徒自身の言葉で表現させたりすることを多くする必要がある。

○ 生徒の現状に対応するため、校内人事等は、生徒指導、学級経営等の充実に結びつく重点化が有効と考える。

○ 「学ぶことは生きること」という理念は、社会性が未熟な生徒には理解しにくいかもしれないため、「学ぶこと」「生活すること」を具体的に指導していくことが必要である。

③ 授業について

○ 生徒が集中して学習するためには、授業力の向上が急務である。全校で一致して取り組む授業づくりの手だて（または授業のルール）などが必要である。

○ 勉強することの必要性を感じている生徒の気持ちに応える学習指導をすることで、教師への信頼感がより高まるのではなかろうか。生徒に「できる・分かる」を実感させ、学力を伸ばす授業をすることが有効である。

④ その他

○ 道徳の時間や学活等で、ロールプレイやグループエンカウンターなどの手法を取り入れた学習指導を厚くすることが有効である。

○ 生徒会を中心に、生徒の自治能力を育てる取組を積極的に進める必要がある。

○ 掃除用具入れに、カーテンや扉をつけるなど、教室環境を整えるために、学年等で共通した取組を進める必要がある。

教育委員会に対して

① 校内研修や授業研究の推進について

○ 自己肯定感を高める取組や授業づくりに関する校内研修において、指導主事等が好事例を紹介するなど継続的な指導が必要である。

② 人事上の配慮について

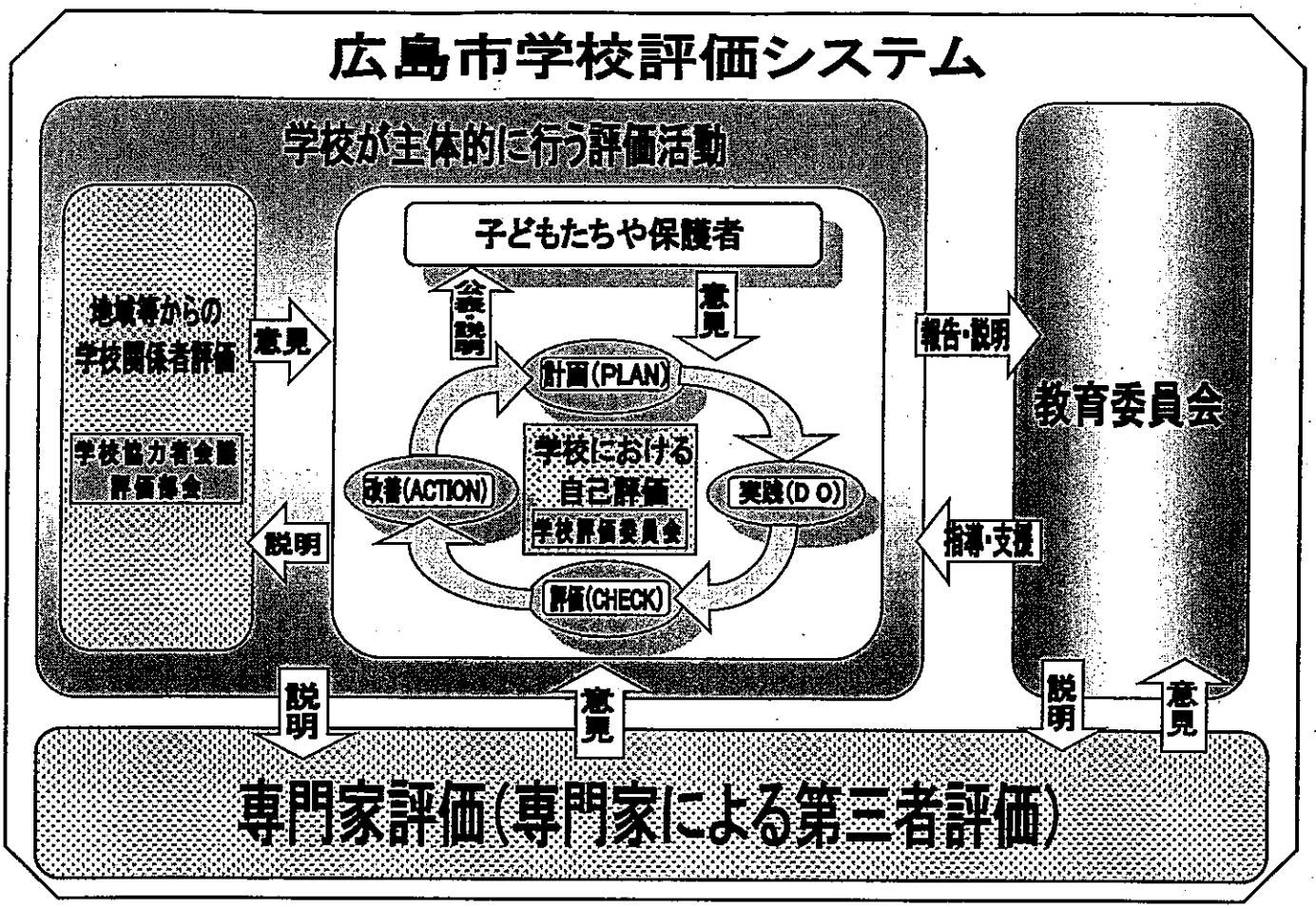
○ 生徒の現状に対応するためには、授業づくりと生徒指導の両面を具体的に進める取組の核となる教員の配置が必要である。

③ 小学校から中学校への引継ぎの徹底について

○ 今後、より適切な生徒の指導や対応の方途を考えるために、小学校において指導が難しい状況にあった学級については、関係小学校と㋐ 具体的な状態、㋑ 課題が生じたきっかけ・誘因の主たるもの、㋒ 小学校の取組の経緯、㋓ 保護者の対応やとらえ、㋔ その当時の児童の思い等について遡って引継ぎを徹底するよう指導することが必要である。

○ なお、小学校から中学校への引継ぎの徹底については、機を捉えて全市的に指導されることが望まれる。

参考資料


広島市学校評価システム
学校が主体的に行う評価活動
子どもたちや保護者
地域等からの
学校関係者評価
学校協力者会議
評価部会
意見
説明
公表・説明
意見
計画(PLAN)
学校における
自己評価
学校評価委員会
改善(ACTION)
実践(DO)
評価(CHECK)
報告・説明
教育委員会
指導・支援
説明
意見
説明
意見
専門家評価(専門家による第三者評価)